

編集後記

「依存のない自立は孤立にすぎない」とは、イギリスの精神分析家ウィニコットの言葉である。どうということか？ 社会心理学の入門書では、次のように説明されている。ウィニコットは、小児科医としてたくさんの母親と幼児を観察し、幼児は母親のいるときのみ、母親を忘れて自分のしたいことに夢中になれる（つまり自分自身になれる）、ということに気づいた。幼児は、母親がいなければ、淋しさのあまりとても自分のしたいことなど考えもつかない。母親はいなければならない。しかし、それは忘れられるために必要なのだ。ここに依存と自立の逆説がある。自立と依存は反対概念ではない。かけがえのない存在とつながることによってはじめて、おのれのかげがえのなさを実感することができるのだ。

ウィニコットのこの主張は、自立と依存は反対概念であり、依存を切り捨てることが自立だ、という自分が信じてきた常識を根底から覆すものであるが、「幼児は母親のいるときのみ、母親を忘れて自分のしたいことに夢中になれる」という指摘が、ぼくにはあまりにも説得的であり、納得せざるをえない。そのインパクトは、ぼくの中でいろんな方面に飛び火したが、ひとつ痛切に思ったのは、われわれにとってスポーツ科学研究室とはまさに「母親」のような存在ではないのか、ということ。教員や院生、学生にとってスポーツ科学研究室とは、われわれが自立するために安心して依存できる場所であり、われわれが自分たちのやりたい研究に夢中になれるのも、この場所があってこそ、である。

スポーツ科学研究室（旧体育共同研究室）を40年以上にわたって支えてきてくださった関根美智子特任助手が今年度いっぱい退職される。長年にわたるあたたかい有形無形のサポートに心より感謝申し上げたい。ありがとうございました！

本年報に掲載された糸数温子さんの論文は、大学院生による投稿論文であるため、規定にしたがって教員2名が査読審査を行った。

本年報は、科学研究費助成事業基盤研究(C)「グローバル化社会の多様化する主体/コミュニティと「生活圏」としてのスポーツ研究」(研究代表者：坂なつこ、課題番号18K1810849)による研究成果の一部である。
(坂上 康博)

一橋大学 スポーツ 研究

Vol. 38

スポーツの過去・現在・未来と生活圏

2019年12月27日 発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL 042-580-8270

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~sport/>
